
魔法戦記バカテスForce ~ IF ~

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記バカテスForce（IF）

【Nコード】

N2084BA

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

この作品は魔法戦記りりなのForceとバカと年上の同級生と僕とちっさい幼なじみとのクロスコラボになっております♪

ちなみにIF…つまりもしもの世界ですので…先に連載してる話とは別作品です♪

ツグミとリュウセイの甘いラブシーンを期待しててください！！ちなみにJACK様とカトラス様とLAN武様からキャラを借りております♪

設定

リュウセイ・サカキ

【年】20

【魔導師ランク】陸戦B

【デバイス】アームデバイス・マサムネ

【魔法系統】近代ベルカ式

【レアスキル】爆炎

【デバイスフォーム】

ハリセンフォーム・マサムネ通常フォーム。主にツツコミに使われる。否殺傷限定のフォーム。

バンカーフォーム・マサムネ戦闘フォーム。リボルバー式のカートリッジ機構を装備。バリア破壊を主目的としたリボルビング・バンカーをメイン・ウェポンにして、攻撃を行う。

移動は足に装備されたキャタピラブレードで行う。

【バリアジャケット】

スパロボOGキョウスケ・ナンブの服そのまま。色は黒。

備考)

自由気ままな旅人。ここではエリオ、キャロとも面識あり。旅の道中で出会ったツグミと共に戦い、心を通わせていく。

性格はLAN武様が書いた『バカとテストと年上の同級生』の『榊龍星』のまま。

基本的に大切なモノを守る為に戦う。

ツグミをとっても大切にしており傷つけられると烈火の如く怒り暴れ出す。

リアクト後の武器は斬艦刀型のディバイダー。

この世界の主人公である。

ツグミ・シュトロゼック

年齢)

16～17くらい

見た目年齢は小学校3年くらいと見られる(笑)

身長)

139cm

容姿)

黒髪のロングヘアで黒色の瞳。

若干垂れ目で可愛い系

胸はFくらい

性格)

『僕とちっさい』の雨宮つぐみと同じだが、多少リュウセイ効果で甘えん坊の寂しがりになってる

備考)

旅をしてるリュウセイに助けってもらって一緒に行動を共にしてる。

別の時空にいる元となる『つぐみ』の記憶をたどり、理解してることがある。

シラヒメとセリカを姉と思って慕っている為、リュウセイが用事の時はシラヒメとセリカを捜しに彷徨うことがある。

ミオを母のように慕っている。ここではアキヒサとアヤトを知らない為、初対面のような対応になる。

リュウセイがくれる物全てが宝物ように扱う傾向がある。

ルイセとたまに遊んでいる場面があるとか？

プロローグ？出会い（前書き）

ツグミとリュウセイの出会いです

ブローグ？出会い

「くそっ！雨かよ！近くに遺跡があつて助かったぜ」

ずた袋を担いだ青年が、古い遺跡の入り口で雨宿りをしていた。
身長は200センチくらいであると思われる。

『主、遺跡内に生命反応有り』

彼の持つアームドデバイス「マサムネ」が遺跡内に生命反応が有る事を彼に告げる。

形状はハリセン型になっているようだ。

「こんな古い遺跡にか？……第六感にビンビン来やがるな。行ってみるか」

青年は荷物を担ぐと、遺跡内へと向かつて歩き出した。

「随分入り組んだ場所だな。これ本当にただの古い遺跡か？」

『ただの遺跡かまだ不明です』

そんな会話をしながら青年が複雑に入り組んだ遺跡内部を抜け最深部の扉へと辿り着いた。

「『マサムネ』内部の生命反応はどうだ？」

そして、青年は物影に隠れながらマサムネに内部の生命反応を数えてもらう。

『ふむ。男性が5、女性が1。武装反応は無し』

「よし！んじゃ行ってみるか！」

青年はそういうと扉を蹴破り、内部へと侵入した。

其処にはポッドの中に入ったちっこい女の子と白衣を着た男性が5人いた。

「し、侵入者だ！」

「警備は何をしているんだ！」

「それよりもこいつを運ぶんだ！！」

白衣の男性達が青年を見てざわざわと騒いだ。

もう一人の白衣の男性が持っているポッドの中にいるちっこい少女は眠っているようだ。

「……何だ？この女の子を見ていると護りたい気持ちになってくる」

『主、それは恋と言う物では？後、管理局に連絡するか？』

ポッドの中にいるちっこい少女を見て青年が呟くと『マサムネ』が声をかけて答えた。

「ん、まずは此奴等全員縛り上げて、それから考えるさ！」

そう言って青年は白衣の男達に飛びかかった。

一分後――。

「一丁アがりつと！」

見事に縛り上げられた白衣の男達とポツドの前に立つ青年が居た。

「さて、取り敢えず、この女の子出すとするか」

青年が拳を握り締めポツドに叩きつけると、甲高い音と共にポツドは砕け散り中に居た女の子が青年に倒れかかってきた。

「おつとと」

『主、なにか嫌な予感があるのですが』

青年が女の子を支えて抱き上げるとマサムネが警戒した様子で呟いた。

「大丈夫だろ…っ!？」

青年がマサムネを見て言おうとすると目に痛みがきて、女の子を落とさないようにして膝をつく。

『主！大丈夫ですか!？』

マサムネの心配そうな声が響く。

「あ、ああ。大丈夫だ」

「……」

青年が返事をしているといつのまにか女の子が目を開けていて青年を見ていた。

「ん、目が覚め……！？」

青年が女の子の視線に気づいてそちらを見ると女の子が全裸なのに気づいた。

「ま、マサムネ！服かなにないか！」

『それらしき物ならありますよ、主』

青年が焦って言うとマサムネは周りを物をサーチして教えた。その場にある青年が持ってきてその服を女の子に着せた。

「……」

「えーっと、大丈夫か？名前解るか？」

じーと青年を見てる女の子を見て聞くと

『主、人に名前を訪ねるのなら自ら名乗るのが先なのでは？』

マサムネに突っ込まれ、青年ははっとする。

「そっぴゃ、そっぴゃ。俺の名前はリュウセイ。リュウセイ・サカキだ。君は？」

「……私はツグミ。ツグミ・シュトロゼック」

リュウセイとツグミが互いに自己紹介を済ませた直後だった。

《警告 警告!》

研究施設内にけたたましい警告音が鳴り響く。

「な、なんだあ！何が起こったんだ!？」

『主、それがしの嫌な予感が的中したようですぞ』

「……私をポッドの中から出したからだと思う」

慌てるリュウセイとマサムネにツグミがポツリと呟く。

「なら、行くぞツグミ！此处から脱出する！マサムネ、セットアップ！」

「きゃあっ！」

『御意!』

リュウセイはツグミを片手で抱きかかえると、マサムネをセットアップする。

「行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ行くぜ！」

「ふえっ!？え？あの、お兄ちゃふみゅっつっつっつ!？」

ツグミは悲鳴をあげながら、リュウセイの身体にしっかりとしがみ

ついていた。

『主、そこを右に行けば出口です』

「了解！」

「ふみゆみゆみゆ！！？」

マサムネの声に従いツグミを抱っこしたまま走る。

プロローグ? 出会い (後書き)

感想と評価をお待ちしております♪

もしも、先にリュウセイがツグミと出会っていたら?
という物語となっておりますよ〜

ブローグ？

ドカーン！！！

「はあはあはあ……！よっしゃあ！どんなもんだい！」

「ふみゅ〜」

間一髪、崩壊から逃げ出したリュウセイがふとツグミを見ると見事に目を回していた。

「ありゃ？」

『主、何時も通りに走り回ったのですか？』

マサムネの指摘に頭を掻いてうなだれるリュウセイであった。

「失敗したな〜」

『主、反省してるのなら別にいいですが。そろそろ野営の準備をしませんと』

リュウセイが苦笑いするとマサムネが伝える。

「そうだな。そうするか」

そう呟いてリュウセイは野営の準備をしてテントを張り、そこで焚火をする。

「みゆ…?」

「おっ、目覚めたかい?」

ツグミが目覚めた時には辺りは暗くリュウセイに抱っこされたままだった。

「みゆ…：…／／はっ！遂和んじゃった／／」

ツグミの中には別世界のつぐみの記憶があった為、遂リュウセイに甘えてしまったツグミであった。

「くすゝツグミは甘えん坊だなゝ」

そう言つてツグミの頭を優しく撫でるリュウセイだった。
それがどこもなく心地よくて目を閉じるツグミがいた。

『主、これからどうなさいますか?』

「そうだなゝ… ツグミをほっとくわけにもいかないし」

マサムネが聞くとリュウセイはツグミの頭を優しく撫でて考える。

「ツグミ、俺と一緒に旅しないか?」

「!…いいの?」

リュウセイはどこか不安そうなツグミを見て笑顔で言つとツグミは小首をかしげて尋ねた。

「おう！よく言うだろ、旅は道連れ世は情けってさ」

「行く！お兄ちゃんと旅したい！！」

リュウセイが笑顔で言うツグミは笑顔で答えていた。

「じゃあ、決まりだな。明日は早くに起きて近くにある街に行って服やら買おうぜ」

「うん！ありがとう、お兄ちゃん」

リュウセイはニカツと笑って言うツグミは嬉しそうに笑って抱きついた。

この時、ツグミのおおきなふくらみがあたっているのでリュウセイはなるべく我慢していた。

同時刻の第12管理世界フェディキア St・《セント》ワレリー港

上空をヘリコプターが飛んでおり、燃えてる建物があった。

「お疲れ様です。フェイトさん、ティアナ執務官！

押収物には該当しそうな品、ありませんでした」

眼鏡をかけて茶髪のロングの女性が言う

「そう。銀十字もディバイダーもここじゃなかったか」

金色の長い髪を一つにまとめている女性が呟いた。

「『エクリプス』の感染者を出すわけにはいきません」

「うん」

茶髪のロングヘアーの女性が銃機を持っている方が呟くと金髪のロングヘアーの女性が頷いた。

「もしも感染者が出たのなら」

「なんとしても捕獲しないと」

二人の女性は決意するように呟いた。

ブローグ？（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第一話

「んじゃ、ツグミの服を買いに行きますか!」

リュウセイはテントなどの野営道具を仕舞うと、ツグミを抱き上げて歩き出す。

「お、お兄ちゃん。あたし歩けるよ／＼」

ツグミが顔を真っ赤にしてリュウセイに言うが、

「駄目駄目。ツグミ靴履いてないだろ? そんなんで歩いたら足怪我するぞ?」

と正論を返され黙り込んだ。

『ツグミ嬢。主のしたいようにさせてやって下され』

ツグミが黙っていると、リュウセイの首にかけられたマサムネが話し掛けてきた。

「えっと」

『遅れ申した。それがし、主のデバイスでマサムネと申す。以後お頼み致します』

その声に気づいてツグミはそちらを見ると律義に自己紹介をした。

「此方こそお願いします」

『いやいや、律儀なお嬢さんですな。主は良きお人に出会えた』

ぺこりと頭をツグミは下げて言うとマサネムは感慨深げに呟く。

「おめーはアームドデバイスの癖にお喋りだよな？エリオのデバイスとは大違いだぜ」

マサムネとツグミの会話にリュウセイが入ってくる。

『それがしは、ミオ博士に作られた特別製ですからな。そう言えば、そろそろ戻らねば博士に怒られますぞ？』

「ミオ？」

「ああ、俺の母親だ」

マサムネとリュウセイの会話に割り込むとリュウセイは説明した。

「……もしかして、見た目があたし位だったりしない？」

「！…良くわかったな？」

ツグミは別の世界の記憶を引き出して尋ねると驚いたようにリュウセイがこちらを見る。

「あはは、何となく……かな？」

ツグミは笑ってごまかした。

「？まあ、行こうぜ」

「うん、お兄ちゃん」

リュウセイは不思議そうな顔したが笑顔で言い、ツグミを抱き上げたまま歩き出す。

しばらく歩いて街に到着したリュウセイはすぐにミオがいる家に戻る。

「あら、お帰りなさい。リュウセイ」

「お帰り、りゅくん」

「お帰り、リュウセイ」

にこにこ笑顔で言うロングの黒髪を一つのお団子に纏めた見た目中学生くらいの女の子がリュウセイを出迎えた。彼女の名前はミオ・サカキである、リュウセイの母親だ。

そして、マサムネを作った博士でもある。

ミオの隣には背は凡そ158センチ位の長身とは言えないがスタイルは良く、黒と言うより濡れ羽色と言えるその髪は腰より下まで伸びて、それをポニーテールに纏めて、少々吊り目気味の顔は愛嬌のある笑顔を浮かべており、何よりも特筆すべきは大きめの制服ですら隠しきれないツグミより大きなその胸だろう。

彼女の名前はセリカ・セガワ。その彼女の足元に居るのは赤い魔狼のルイセだ。

使い魔としてセリカの傍にいるんだが…あんまり遊んでももらえなくて不満のようだ。

「ただいま。母さん、セリ、ルイセ」

リュウセイは笑顔で答えて家の中に入る。
中はとても広く、お屋敷みたいだといっても過言ではなかった。

「リュウセイ……んむ？その人誰え？」

ルイセがリュウセイに飛び付いてふとツグミに気付く。

「あ、初めまして。わたしツグミ・シュトロゼックって言います」

ツグミがペコリと頭を下げて挨拶をする。

「あらあら、初めまして。マサムネの生みの親でリュウセイの母親のミオ・サカキです」

「……ツグミちゃん？その、変な事聞いても良いかしら？」

笑顔で挨拶をしていたミオが不意に表情を曇らせる。

「は、はい。何でしょう？」

「あなた、何で下着着けて無いのかしら？」

ツグミが小首を傾げて聞くとミオが表情を曇らせたまま尋ねる。

「ぶーっ！」

「わっ！きちやないよリュウセイ！」

ミオの質問にルイセを抱っこしていたリュウセイが吹いた。

「えっと…それは…その」

ツグミはその質問になんて言えば良いのか迷っていた。

「それは？」

ミオはまじまじと見つめて尋ねる。

「あう…と、途中でその…人攫いに合いました！
それで下着とか破れちゃって…だから」

思いついた事をミオに伝えてみた。

「あら、そうなの？リュウセイ」

「へ？あ、ああ…そうだよ！」

ミオの疑問が次にリュウセイに移った。

「じー」

しどろもどろながらに説明する二人をミオはじっと見つめている。

「か、母さん？」

「あ、あの？」

「……嘘ね？本当の事言えない？」

二人の嘘を見抜き、疑問をぶつけるミオ。

「…………ごめん」

リュウセイはそんなミオにただ頭を下げるだけだった。

「ま、いいわ。母さん、リュウセイ信じてるから。でも、無理矢理は駄目よ?」

ミオの爆弾発言にツグミは真っ赤に染まり、リュウセイは瞬時にマサムネハリセンフォームでミオにツツコミを入れた。

「マスターお客様ですの…………?って何やってますの?」

「マスター、お茶が入りましたって…何んですかこの状況」

「あゝん、シラヒメちゃん! コウキくん! リュウセイがいじめるの」

ツツコミを入れられたミオは部屋に入って来た長身の女性と長身の男性に泣きつく。

「…………リュウセイ?これはどうした事ですの?」

「リュウセイ、説明願いますか?」

女性と男性がリュウセイを見て尋ねる。

「母さんがボケかましたからツツコミ入れたただだよ。…………ただいまシラヒメ、コウキ」

リュウセイが苦笑いしながらその質問に答えると笑顔で言う

「お帰りなさいですの♪そちらのお嬢さんは？」

「お帰りなさい、リュウセイ。そちらの方は？」

女性と男性は笑顔で答えてツグミを見る。

「あ！はじめまして、わたしはツグミ・シュトロゼックです」

「はじめまして、マスターミオの使い魔兼秘書のシラヒメですの♪」

「はじめまして、同じくマスターミオの使い魔兼執事のコウキです」

そう言うて女性と男性……シラヒメとコウキはツグミに挨拶をした。

「シラヒメおねえちゃん♪」

リュウセイの腕から降りてシラヒメに飛びつくルイセ。

「ルイセちゃん…今日も元気いっぱいですね」

「うん♪日光浴したいくらいに元気」

シラヒメが笑顔で抱き上げて言う。ルイセは尾を振って鳴く。
魔力を通してルイセは喋る魔獣なのだ。

セリカが気に入っていつもそばにいて守っているとか。

「セリカ様、紅茶をどうぞ」

「ありがとう、コウくん」

コウキは紅茶をセリカに渡す。
どこにでもあるほのぼの空間だ。

「セリカ、書類はこれでって…リュウセイ？」

「お、久しぶりだな。トオル」

鴉の羽根を羽ばたいてきた男性を見てリュウセイは笑顔で言う。

第一話（後書き）

ツグミ「どうも！ツグミ・シュトロゼックです！」

リュウセイ「リュウセイ・サカキだ」

そして作者です！

ツグミ「ところで、作者ここからどうするの？」

リュウセイ「だよな、リアクトだってまだ…だし」

ふっふっ…もう少しだけ待つのだ！

バカテス元祖主人公とそのリアクターも遊びにくることにしてるからね

ツグミ「キャラをちゃんと動かせるようにしないとダメだよ？」

リュウセイ「借りて動かしてるんだからな、それくらいはちゃんとしろよ」

わ、わかってるよ！

ではでは、感想と評価をお待ちしております

第二話

「ありがとう、トオル。そういえば、りゅうくん？
マサムネのバンカーフォームは調子どう？」

トオルから書類を受け取ったセリカがリュウセイに訪ねる。

「ん、やっぱりローラーよりキャタピラの方がしっくり来るな。
ローラーだと力が入らん感じがする」

そう言ってリュウセイはマサムネをセリカに渡す。

「ん、りゅうくんは重量級だからローラーよりキャタピラの方が
しっくり来るんだろうね。マサムネ、調整室行こっか？」

『御意、ドクターセリカ』

セリカはマサムネを受け取ると調整室へと向かった。

「所で母さん。お客さんが来てるんじゃないのか？」

「そうでしたの！マスターミオ？アヤトさんとアキヒサさんがお越し
になられてますの」

「あら、そうなの？なら行かないとね」

リュウセイに言われて思い出したのか、シラヒメは手をポンと打つ
と伝えてミオを連れて行った。

ルイセはシラヒメの頭の上で器用にバランスをとっていた（笑）

「コウキ。母さんが迷惑かけるな」

「いえいえ、使え甲斐のあるお方ですよ？」

そう言つてコウキはクスクスと笑つた。

「みゅ」

ツグミは何となく寂しく思い、リュウセイの近くに行くとリュウセイに抱きつく。

「どうしたツグミ？」

リュウセイはそんなツグミを抱きかかえると優しく撫でるのだつた。

応接室ではアヤトとアキヒサが楽しく会話していた。

二人の隣には長身の綺麗な女性とちみっこい女の子がいた。

「アヤトくん、アキヒサちゃん。お久しぶりね」

「あ、ミオさん」

扉が開いてミオが二人に近寄るとアキヒサとアヤトは立ちあがつてお辞儀をする。

「あら？あらあら……二人共もう彼女できたのねえ」

ミオが長身の青色のフワフワロングヘアーの女性と
ちみつこいまんまロリで赤い髪のロングヘアーの女の子を見てクス
クスと楽しそうに笑って言う。

すると、二人がずこつとこけていた。

「アヤト、大丈夫なん？」

「アキ兄？大丈夫？」

二人はこけたアヤトとアキヒサに声をかけて立ち上がらせる。

「だ、大丈夫だ。ミク」

「僕も大丈夫だよ。アヤカ」

アキヒサとアヤトは立ち上がると苦笑いを浮かべて答えた

「マスターミオ、遊ぶのもほどほどになさいませ」

ルイセを頭の上に乘せたシラヒメがミオをたしなめていた。

「ちょっとしたジョークなのになぁ」

ふうと頬をふくらましてミオが言つと

「リュウセイにおこられるよ？」

ぴょんとルイセがシラヒメから降りて伝える…と

「も、モフモフ…だと！？」

「わう?。」

アヤトがルイセに注目していた。

「アヤト、こんな純粋な獣に手を出すつもりか?。」

アヤトの傍で寝そべっていた狼が呆れながら尋ねた。

「うるせ!こんなに可愛いモフモフを見て我慢できるか!。」

「わきゅー!?。」

アヤトが叫ぶとルイセが怖がってシラヒメの後ろに避難してる。

「モフモフ……。」

アヤトはルイセを凝視しながらそう呟いていた。

「うー。リュウセイイ。」

そんなアヤトを見ながら、じわりじわりとルイセは後ずさりながら助けを呼んでいた。

「相変わらずだなアヤト。アキヒサも久しぶり。」

そんな時、ツグミを抱っこしたリュウセイが応接室に入ってきた。

「リュウセイ!。」

ルイセはシュバツとリュウセイの後ろに隠れると背中に登り、肩から顔を出してアヤトを見る。

「リュウ（リュウセイ）！！戻って来てたの（か）！？」「

アヤトとアキヒサはリュウセイを見て叫ぶ。

「ついさっきな。っていうか、彼女出来たのか？お前ら」

ミオと同じ事を言うリュウセイに皆がずっこけた。

「リュウまで、ミオさんと同じこと言わないでよ！」「

「そうだ！ミクに失礼じゃないか！」

アキヒサとアヤトは起き上がってリュウセイに言う。

「いや、わっち等は別に」

「うんうん…彼女として扱ってもらっても問題ないし」

ミクとアヤカはしれっと呟いた。

第二話（後書き）

感想と評価をお待ちしております♪

間違えまくりだ（汗）

第三話

「ルシエド、久しぶりだな」

リュウセイはアヤトの傍に行くと言っている狼の背中を撫でる。

「久しぶりだなリュウセイ。元気そうで何よりだ」

ルシエドと呼ばれた狼は顔を上げるとリュウセイに声をかける。

「所で、リュウ。その女の子は？」

「ん？ああ…この子は」

アキヒサがツグミを見てリュウセイに訪ねた。

「はじめまして、ツグミ・シュトロゼックです」

ツグミはアキヒサ達にぺこりと頭を下げた。

「あ、はじめまして。僕はアキヒサ・ヨシイです、よろしくね。ツグミ」

「俺はアヤト・カンナギだ。よろしくな、ツグミ」

アキヒサとアヤトも頭を下げて自己紹介するとツグミは笑顔で頷いた。

「我はルシエドだ。よろしくな」

ルシエドも挨拶する。

「わっちはミク・シュトラゼックや。よろしゅうな」

「私はアヤカ・シュラトです。よろしくね、ツグミちゃん」

ミクとアヤカも自己紹介をする。

「ところで、何か用事があったんじゃないの？」

「あ、そうでした。実はアヤカ達のことでも聞きたいことがありました」

ミオが苦笑いして尋ねるとアキヒサはアヤカを自分の膝の上に乗せて言う。

「俺は旅でたまたま見つけてミクといえるんだけど」

「その後、何度も襲われてな」

アヤトはミクを見てからミオを見て言う。ルシエドがため息をついて呟いた。

「アヤトもなの！？」

「もって…アキヒサもなのか」

アキヒサとアヤトが驚いて会話していると

「アキヒサ、アヤト。わりいが俺とツグミはこれからちょっと出かけてくるからさ。」

ゆっくりしててくれや」

「あ、うん」

そう言っただけでリュウセイはツグミを抱っこして応接室から出て行った。

「お兄ちゃん、どこ行くの？」

「朝言っただろ？ツグミの服とか下着を買いに行くのさ」

リュウセイは不思議そうな表情のツグミを撫でると靴を履いて歩き出した。

暫く歩くと急にリュウセイは歩みを止める。

「お兄ちゃん？」

「……狙われてるな」

リュウセイは鋭い表情で周りを油断なく見回す。

「ちっ！マサムネの調整が終わるまで待つべきだったか？」

調整中のマサムネを置いてきた事を悔やみつつ

リュウセイはまるで野生動物の様に敵意に過敏になっていた。

「……お兄ちゃん」

「大丈夫だ、そんな顔すんな」

ツグミが不安そうな瞳で見つめるとリュウセイは笑って頭を撫でて辺りを警戒しながら人気のないほうへと向かう。

「君。そいつを渡してもらおうか」

白衣を着た男性がリュウセイを見てそう言う。

「嫌だね。誰が渡すかよ」

「……そうか、残念だ。この街の人と君の知り合いにも死んでいただこうか」

リュウセイはキッパリと告げると男性が残念そうに言って周りにいる護衛の兵士に指示をする。

「ダメ！あたしがそっちに行くから……お兄ちゃんにもこの街の人にも手を出さないで！」

ツグミはリュウセイから降りるとそう告げた。

「ツグミ、何言ってるんだ！」

「だって…そうしないと…っ」

リュウセイが考え直せというふうにツグミの肩を掴んで言う。

「よかるっ、お前が来るなら手を出さないでおいでやる」

男性が笑ってツグミの言った条件を飲む。

「……ありがとう。お兄ちゃん、短い間だったけど一緒にいられて嬉しかったよ」

そうツグミが言いつと歩いて行こうとする…が

「行かなくていい。俺がツグミを守るし、街の奴らや母さんだって大丈夫だ」

リュウセイが真っ直ぐツグミを見つめて腕を掴んでそう告げる。

リュウセイ達が襲われている所とは別の同時刻 第18管理世界外
世界 イスタ

街は一面焼け野原になっていた。

「たった二人だったのよ。男と女の二人組」

包帯をして幼い娘を抱きしめる女性が茶色の長い髪の女性にそう話す。

彼女は本局警防部所属のティアナ・ランスター執務官だ。

「あの二人がこの村を」

痛々しいほどの包帯まみれの状態でこの街で起きた出来事をティアナに伝えている。

家のガレキの傍に沢山の死体が置かれていた。

「この土地のみんなを。本当にあつという間に」

「犯人はいつたいどうやってこんな破壊を？」

女性がそう言うとティアナは女性に尋ねた。

「男の方は大きな剣を持ってて、女の方は黒い本を…」

「それは、こんな……？」

女性の話を聞いていたティアナが二枚の写真を見せると

「それ……っ！それ…その大きな剣ー！」

女性はその写真を見て怯えながら叫んだ。

「間違いないですね、執務官」

ガレキの中をティアナと同じ所属の部下達を歩くとそう呟いた。

「はい。九分九厘 エクリプス保有者の仕業です」

ティアナは同意するように答える。

「やはり、例のフツケバインとかいう組織が…？」
ファミリー

白衣を着た女性が聞くと

「これからその調査をしようと思います。生存者搜索の方よろしく

「お願いします」

「はいっ！」

ティアナがそう言うのと隊員たちは敬礼して大きな声で返事した。

第3管理世界ヴァイゼン 首都海上橋

「ティアナはもう現地入りですかね…？」

「そうだね。もう調査を始めてる頃かも」

眼鏡をかけた女性が言うのと金髪ロングの女性が車を運転しながら答える。

金髪の女性は本局次元航行部所属のフェイト・T・ハラウオン執務官だ。

カタカタ

「広域捜査は私達がヴァイゼンから、ティアナがイスタからで、あの二人がルヴェラの方に」

「うん」

眼鏡をかけた女性もフェイトと同じ所属で執務官補佐のシャリオ・フィリーノである。

「各地の捜査隊も動いてくれますが、やはり手が足りませんねえ」

「手配はしてるよ、大丈夫」

シャリオがため息をつくように言うとフェイトは運転しながら答える。

「後は向こうが…早めに動きだしてくれるといいんだけど」

フェイトがそう言つと運転に集中する。

同時刻 第1世界ミッドチルダ 南部海上

ゴウン

そこに一隻の船が空を浮いている。

この船は時空管理局LS級艦船『ヴォルフラム』である。

その中にある捜査司令の執務室にて

「司令」

椅子に座ってる女性に誰かが声をかける。

「そろそろ記者会見に出かけるお時間ですよ」

銀髪の長い髪の少女がセミロングの女性に伝える。

彼女の名前はリインフォース？《ツヴァイ》司令補である。

「うん」

セミロングの女性は頷いてキーボードに触れていた手を止める。

「現状の担当案件もこの解決発表で最後です。これでやっと動けますね」

「そやね」

リインがそう告げると女性が椅子から立ちあがって同意して振り向いた。

「おおきにな、リイン」

彼女は『元』機動六課部隊長 海上警備部捜査指令の八神はやてである。

ヴォルフラムはそのまま空を飛んで移動する。

「いろいろ よー頑張ってくれた」

「とんでもないです」

その中を歩いてはやてとリインは会話していた。

「ほんなら いこか。みんなを待たせたらあかんし」

「はいですっ！」

はやてとリインは笑顔で言うと二人で歩き出した。

第三話（後書き）

感想と評価をお待ちしております
♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084ba/>

魔法戦記バカテスForce ~ IF ~

2012年1月9日01時50分発行